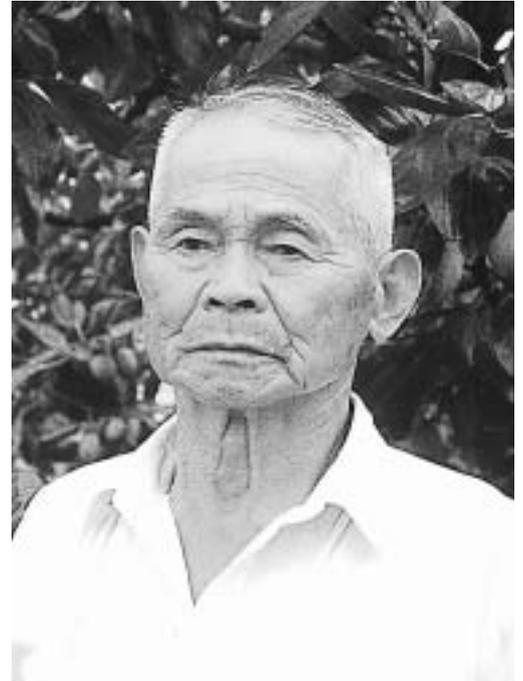


筆柿

庭になつていた筆柿が
珍しい宝の柿へ。
全国へ向けた商品化、
それはまさに渋との戦いだった。

全国シェア、生産量など、日本一を誇る幸田町の筆柿。今でこそ全国での筆柿の地位を確立しましたが、「日本一」を目指した当時は、多くの問題にぶつかってきたそうです。
今回は、その当時の逸話や苦い経験、そして今後の取り組みなどについて、3人のかたから聞きました。

もう
筆柿で儲かるのか、
仲間と一緒に巻き込んで
いいのか、
さまざまな不安に
駆られましたよ。



長谷一男さん
(桐山区)



各支部で出荷に使われていた木箱

幸田町の筆柿生産始まる
庭などになつていた筆柿を、蒲郡の業者がたびたび買いに来ることがあり、「この柿が売れるのであれば」と生産が始まったのが、幸田町の筆柿の第一歩でした。
当時(昭和28年ころ)は、地元の人

たちで苗を作り、生産量を増やしていきました。「桃栗三年、柿八年」といわれるように、苗を植えてもなかなか実をつけない筆柿。辛抱して待ちました。

各支部で出荷始まる

収穫時期の早さ、糖度の高さで、予想以上に売れ行きの良かった筆柿を、須美、桐山、上六栗、逆川の各支部単位で出荷をするようになりました。このころは、リング箱や石灰箱などの木箱に筆柿を詰め、上蓋に麦わらを使い、自転車の荷台に縛って、デコボコ道を長い時間かけて出荷していました。

その後、オート三輪の出現から、出荷先も、名古屋や浜松などに広がっていき、木箱も段ボールへと変化していきました。

筆柿上京

筆柿の出荷が軌道に乗ってきた昭和36年、東京で売つたらどうだろうかという声から、いざ出荷。「東京に出荷しても売れるかどうか分からない。損をする場合もある。本当に仲間を巻き込んでも良いのだろうか」と、心配はつきませんでした。東京での筆柿の売れゆきを見て、これならやっていけると確信を持ちました。

そして、各支部で行っていた出荷も効率を良くするために、昭和39年から共同で集荷するようになりました。

幸田町の筆柿、 本格的な挑戦が始まる



筆柿の歩み

- 昭和41年 桐山開拓パイロット工事開始
- 昭和42年 農協の下部組織として柿出荷組合が結成
- 昭和44年 桐山果樹選果場完成
- 昭和47年 長嶺パイロット工事開始
- 昭和49年 販売金額 1 億円突破
- 昭和51年 ガス脱渋試験開始
- 昭和54年 筆柿TV初出演、名古屋市デパートで無料配布
- 昭和57年 第42回中日農業賞受賞
- 昭和59年 六栗筆柿選果場稼働
- 昭和60年 岐大式果実品質判定機導入
- 昭和62年 アルコール併用脱渋庫新設
- 平成 2 年 ふる里パッケージ作成
- 平成 3 年 筆柿渋判定機開発研究会発足
- 平成10年 自動判別機導入
- 平成13年 「みかわっこ」販売開始
- 平成14年 あいち経済連 特別栽培「いきいき愛知」認証



ふる里パッケージ



桐山開拓パイロット事業

一部地域から全町へ

受け入れ市場も増え、さらなる生産量が必要となったことで、昭和41年に桐山地区で、丘陵地を果樹園として造成する開拓パイロット事業に取り組むことになりました。当時のパイロット事業は、ミカン栽培でなけれど国からの許可が出なかったのですが、気温の関係でミカン栽培の無理な桐山地区内では、筆柿なら生産できると必死になって許可申請を行ったことを覚えています。そして、パイロット事業が完了した次の年に、桐山果樹選果場が完成しました。この2つの事業を成功させたことが、一部の地域で取り組んでいた筆柿栽培が全町へと広がって行くきっかけ

かけになり、昭和47年には、長嶺パイロット事業が開始されました。

筆柿生産が認められた瞬間

筆柿生産が全町へ広まってきたいき、町の特産として定着してきたころ、一つの喜ばしい出来事がありました。それは、中日農業賞の受賞です（昭和57年）。この賞は、中部9県の候補者の中から、地域農業の発展と新しい農村作りに貢献した営農団体と個人に贈られるもので、甘柿と渋柿の混在する不完全甘柿の全国出荷を成功させ、生産量を増やしてきた私たちの努力が認められたものでした。このときは、本当にうれしく思いました。この受賞をきっかけに、栽培技

術や設備の改善の余地のあった筆柿栽培をさらに発展させ、消費拡大していくことを改めて決意しました。

消費拡大への不安

順調なすべり出しをしてきた筆柿が、さらに知名度を上げるためには、消費拡大に取り組まなければなりません。柿そのものの味には自信がありましたので、いかに甘柿のみを提供していくかが力ギとなりました。昔からの知恵で渋柿を減らす栽培方法はありましたが、それは大量生産や採算性を考えると、決して理にかなっていないものではありませんでした。消費拡大への道は、渋柿対策にありました。

柿知識

筆柿の由来

筆柿栽培の歴史は古く、矢作川沖積層と三ヶ根山麓に広がる丘陵洪積層からなる肥沃な土壌と温暖な気候に恵まれ、江戸時代にはすでに農家の庭先で栽培されていました。

幸田町内で、一番古いといわれている筆柿の樹木は、推定樹齢300年で、今でも上六栗地内で果実を实らせています。

筆柿の名称は、よく知られる次郎柿や富有柿とは違い、小ぶり



推定樹齢300年の筆柿

で筆の先のようにとがった形をしていることからこの名が付いたといわれています。

また、甘いお菓子が少なかった昔、農家の庭に実る筆柿は、大人にとっても子どもにとっても貴重な甘味だったことから「珍宝柿」という別名もあります。

筆柿生産者の一番の敵は渋。
渋との戦いは
生半可なもんじゃあ
なかったね。



日本一を妨げる天敵
筆柿農家の一番の悩みは、やはり渋です。不完全甘柿であるため、仕方ないことなのですが、消費者にと



西三河選果場運営委員会

会計 **平岩義典**さん
(須美区)

平成10・11年度西三河選果場運営委員会委員長

ってみれば、購入した柿の一つでも渋いものが入っていたら、二度と買ってはもらえません。この渋柿をいかに判定するかが、市場で勝ち残っていくために必要なことでした。

長年のカンから機械へ

昔は、生産者の長年のカンを頼りに、渋を判定していました。小さいころから筆柿を見て育ってきたので、大きく間違えることはありませんでしたが、絶対と言い切れるものでもありませんでした。

そんな中、注目したのが渋を判定する岐大式果実品質判定機でした。これは、柿に光を当て、光の通り抜ける量で甘柿か渋柿かを判定するもので、生産者がそれぞれ導入し、高い確率で渋を判定できるようになりました。

しかし、一つ一つ柿の渋判定を行っていくため、時間と労力は大変なもので、当時は、夜中の12時を過ぎることは当たり前でした。

夢の自動選果機

その後、時間短縮や重労働を解消するといった夢を抱き、取り組みが始まったのが新選果機の導入でした。

新選果機は、甘柿・渋柿の判定を自動で行うだけでなく、一連の行程で、筆柿の大きさを分け、袋詰まで行う優れ物です。まさに筆柿と共に生産者の夢をも運ぶ機械です。

日本一への、
果てしなき「渋」との戦い



この地方でしか育たない筆柿



JAあいち三河

安藤正巳さん

また、堆肥などによる栄養で柿が急激に成長し、水太りの状態になることも渋柿になる理由としてあげられています。「筆柿の苗をほかの地域で育てようとすると、渋柿しかありません。なぜ幸田町では甘柿ができるのですか」と聞かれることがあります。幸田町周辺地域では気温が適しているため、雄花と雌花の開花時期が近いことから受粉しやすく、甘柿になりやすいといわれています。

まさに、筆柿がこの幸田町を選んで生育しているように思われます。

筆柿は、不完全甘柿であるため、1本の木に甘い柿と渋い柿がなります。

なぜ渋柿がなるかというと、それは受粉に関係します。筆柿は、雄花と雌花が受粉すると甘柿になり、受粉しないと雌花だけで実になるため渋柿になります。

また、堆肥などによる

初出荷当日の悪夢
初稼動が、初出荷ということもあり、例年になく緊張感が選果場を覆

この新選果機の導入に伴い、研究会を平成3年に発足させ、まずは試作機の製作を開始しました。この開発で一番のポイントが、自動で渋を判定するところでした。今まで使っていた判定機をベースにした自動渋判定機は、思っていた以上に精度の高い判定ができました。これならと思いい、平成10年3月に新選果機導入に至ったのですが、いざ稼動させてみると、思いもしない問題が発生してしまっただけです。まさに、悪夢の一日の始まりでした。

っていたのですが、私を含め、皆新選果機に対する期待で溢れていたと思います。しかし、その期待は稼動直後に裏切られました。試作機のように判定ができないという、あつてはならない最悪の状況を迎えたのです。試作機の段階では、似たような形や大きさのもので試験していたため、うまく判定したようですが、柿にはさまざまな大きさや形があり、それらのデータがなかったため、渋を判定することができませんでした。何度繰り返してもあやふやな結果。これでは市場に出せないと、結果的には、当時の役員全員で、手作業による渋判定をすることになったのです。初

出荷当日だったこともあり、出荷に遅れてはいけなないと、皆あせつたと思いますよ。どうにか、初出荷には間に合ったので良かったのですが…。

データ取り、調整に明け暮れて

稼動初日にハブニングがあつたため、その後は、データ取りや機械の調整などを繰り返し繰り返して行いました。その成果もあつて、どうにか安定した判定ができるようになりました。

工業製品なら新たな機械を導入してもスムーズに稼動するかもしれませんが、やはり筆柿は生もののため、考えていたとおりには行かない、生ものを扱う難しさを感じさせられました。

何はともあれ、多くの生産者から、甘柿と渋柿の選別をしなくてもよくなったことで仕事が楽になったと喜びの声を聞き、当初の目的は達成できたと満足しています。

今では、多くのデータが蓄積され、また、柿の色や重量を分けて判定するようになったことから、約99%の精度で判定が可能になりました。



自動判定機

選果機での作業

戦いは続く
渋柿の割合は、全体の2割程度あります。この渋柿をどうにかならんいかと考えたのが、ガスによる渋抜きでした。この渋抜きもより美味しくするために研究が進められ、今では、アルコールによる渋抜きを行っています。

不完全甘柿であるがための戦い。この天敵から目をそらすことなく、正々堂々と戦っていきたいと思います。

やっとの思いで
ここまでこぎつけた筆柿。
これからも安全なモノを
届けたい。



西三河筆柿選果場 運営委員会

委員長 **夏目 勝さん**
(上六栗区)



袋詰め作業

日本一になる
127戸の生産者によって、年間約1、400トン生産されている筆柿は、全国シェア95%を占めています。もちろん日本一の数字です。これら

は主に、東京都や長野県に出荷され、筆柿を待つ多くの消費者に届けられます。

日本一の地位を確立するまでには、多くの努力や苦勞がありました。が、今後は、この地位を守り続けていかなければなりません。

信頼、それは「安全と安心」

私たち生産者の合言葉は、「安全・安心」そして、美味しく大きい果実です。

この「安全・安心」な果物を栽培するために、ことしから減農薬栽培に取り組んでいます。

この減農薬栽培とは、言葉のとおり、農薬の使用量や散布回数を減らす栽培方法です。私たちは、害虫や病気の発生する時期に最小限の防除を行うため、予察情報をもとに、適期防除に努めています。また、生産者全員に防除日誌を提出してもらっています。

安全で安心できる商品を作りつづけていけば、きつと愛され続けるものになると信じています。

勝ち残るために、消費者のニーズにこたえる

昨年、玉揃えを良くすることや、きれいな柿色が入ったものを出荷するといったような販売方法の改革に挑んでいます。この結果、出荷量は24万ケースから12万ケースへと

築き上げた地位を、 守りつづける



柿知識 筆柿の栄養

柿の成分といえば、何といってもビタミンCです。すっぱいイメージのビタミンCとはちょっと意外かもしれませんが、甘柿に含まれているビタミンCは、レモンやいちごに決して負けてはいないのです。

ほかに、ビタミンK、B₁、B₂、カロチン、タンニン（渋味の原因）、ミネラル（特にカリウム）などを多く含んでいるため、「柿が赤くなれば、医者が青くなる」という言葉があるほど、柿の栄養価は高いのです。

また、「二日酔いには柿」といわれる訳は、ビタミンCとタンニンが血液中のアルコール分を外へ排出してくれるからで、豊富なカリウムの利尿作用のおかげともいわれています。



長嶺東山筆柿団地

減ったのですが、見栄えが良くなったことで、市場関係者や消費者からの評判が良くなり、安定した価格で出荷できるようになりました。

また、新商品として、1個120g以上の大玉甘柿を4個パックし、「みかわっこ」という名称で販売を始めました。この商品販売のきっかけとなったのは、やはり消費者の要望にこたえるためでした。核家族化が進む中、どうしても数量を気にしてしまつとの声から、販売に踏み切りました。この商品は、ことしは5万パック出荷する予定です。

このほかにも、筆柿のワインなどを研究し、成功すれば販売へとつなげていきたいと思っています。できる限り消費者のニーズにこたえるようにしていき、幸田町の筆柿のブランド化を図っていききたいと思っています。

順風満帆、しかし、大きな問題点も

これまで、順風満帆に出荷量を伸ばしてきた筆柿栽培も、大きな問題を抱えています。それは後継者問題です。部会員の高齢化が進んでいるため、多いときには約250人いた会員も今では約130人へと減少しています。この現象は今後も

進む恐れがありますので、その対策として、選果機を導入し、働きやすい環境を作ることで、管理する柿畑の面積を拡大できるように取り組んできました。

これからも、若者たちが働く場として魅力があり、働きやすい環境作りを進めていかなければならないと思っています。

誠意、努力、愛する気持ち

私たちは、何と云っても生産者です。消費者があつてこそ成り立つ仕事です。その消費者に満足していただくためにも、安定的に良い商品を作れることはもちろん、「安全で安心できるモノ」を永遠に求め続けていきたいと思っています。

私たちの誠意、努力、愛する気持ちが詰まっている筆柿。皆さんもひとつづついかがですか。

